慶應義塾
醫学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話（3353）1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　比企　能樹
毎月　1回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●診療時間＝午前9時～午前11時
●電話＝（3353）1211（大代表）

医学部90名 門出を祝う

平成17年度卒業式

平成十七年度大学卒業式が三月二十三日、日吉記念館で行われた。前日からの悪天候も一旦回復し、日吉キャンパスの銀杏並木は、大勢の卒業生とその家族達によって活気に満ち溢れていた。式典は午前十時を若干過ぎる時間に開始された。なお、本年度の卒業生は全九学部で六、四〇四名、うち医学部は九〇名であった。

式典は開式の辞に始まり、まず西村太良・常任理事による学事報告があり、各学部の卒業者数および表彰者数が報告された。次いで各学部の代表者への学位記授与が行われ、医学部代表として加畑宏樹君が壇上に上がった。続いて各種表彰が行われ、医学部からは、まず大学表彰規定による表彰、すなわち主席として関根克敏君が表彰を受けた。続いて小泉体育努力賞として、医学部競走部所属で医学部六年の安田英人君、医学部ゴルフ部所属で医学部四年の中島大輔君以下十一名が表彰された。最後に塾長賞ならびに塾長奨励賞の表彰が行われ、医学部医学研究科博士課程四年の八木満君が、骨代謝に関する国際的な業績を上げたとして、塾長賞を授与された。

「社会を導く指導者たれ」安西塾長式辞

各種表彰の終了後、安西祐一郎塾長が式辞を述べた。塾長は、家族と教職員の尽力に感謝の意を表すと共に、卒業生の門出を祝った。その中でも、社会に出るに当たって、心に留めて欲しいことを以下の三つに要約した。

一、社会を導く指導者たれ
一、自分で考えて行動する、独立した人間たれ
一、協力者たれ

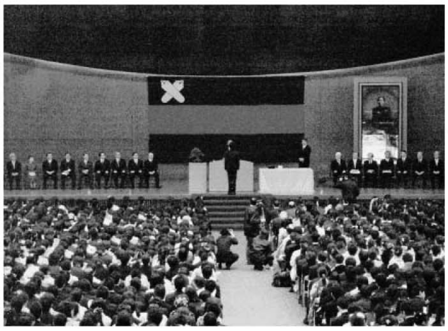
そしてさらに、義塾は創立一五〇周年を迎えるが、偉大な先輩方が作った歴史を背負って立つとともに、志新たにして新しい歴史を作っていって欲しい、と結んだ。

次いで北里一郎・明治製菓株式会社代表取締役会長が塾員代表として祝辞を述べた。続いて総合政策学部の倉知善行君が在学生総代送辞を送った後、これに対して法学部の中尾裕彰君が卒業生総代答辞として、社会に出るにあたっての決意を語った。

最後は会場にいる塾職員、卒業生ならびに卒業二十五周年を迎えた塾員など、慶應社中による塾歌斉唱が行われ、午前十一時二十五分に閉式となった。

引き続き、同会場で二〇〇六年三田会結成式が行われた。終了後、医学部卒業生達は二十二番教室へと移動し、池田康夫医学部長から各々に卒業証書が授与された。

（三年・朝倉崇徳）



学位授与式を挙行

池田医学部長から卒業生全員に

卒業式に続き、学位授与式が正午より、日吉キャンパス第四校舎、22番教室にて行われ、池田康夫・医学部長（内47回）から卒業生全員に「学位記」が手渡された。

冒頭の挨拶で池田医学部長は「今日卒業する85回生は、皆輝いて見える。十一年後（二〇一七年）には医学部創立百年を迎える。その時には各々が慶應をリードできるような人材であって欲しい。」と述べ、卒業生九十名の前途を祝した。

続いて「学位記」が授与され、拍手と歓声の中、卒業生が一人一人進み出て証書を受け取り、池田医学部長と握手を交わした。

（六年　堀　周太郎）

↑肩を組んで「若き血」を斉唱する安西塾長（右から3人目）、池田医学部長（右端）、比企三四会長（右から5番目）

華やかに85回生謝恩会

帝国ホテルで　6年間の思い歓談

85回生が卒業するにあたり、教職員、保護者に感謝の意を表す謝恩会が、卒業式翌日の三月二十四日、帝国ホテル三階「富士の間」にて、華やかに行われた。

式は午後六時半の定刻に、教職員、保護者らが卒業生の拍手に迎えられて始まった。まず池田康夫・医学部長（内47回）による祝辞があり、次いで比企能樹・三四会長（外37回）の挨拶、池田医学部長が音頭をとっての乾杯と進んだ。

祝辞の中で池田医学部長は、「科学的な目を持ち、患者の心のわかる医師になって欲しい。卒業の感動を忘れず、大きな一歩を踏み出して欲しい」と述べ、会場は大きな拍手に包まれた。

本会は、立食パーティの形式をとり、卒業生は、お世話になった教職員や、保護者の間を巡りながら、歓談の時を過ごした。また、卒業生が作成した、臨床実習の各班を紹介するスライドが上映された。各卒業生を直接紹介する場面もあり、各々が、六年間に込められた思い、感謝の気持ちを言葉にした。

会の終りに、比企三四会長より卒業生に「学問のすすめ」が贈呈された。また、卒業生からは、記念品としてキャンパスマップが贈られた。このキャンパスマップは、既に信濃町キャンパス、孝養舎の前に設置されている。

最後に謝恩会実行委員長の柴田浩遵君から「教職員、保護者の皆様の強い支えによって、ここに立つことができる。皆様の恩を忘れず、義塾の一員として恥ずかしくないよう、社会に貢献していきたい」との挨拶があり、参会者全員が肩を組んで「若き血」を斉唱し閉会となった。

参会者の中で、卒業生の福原誠一郎君は、「予科一年生のときに習った先生も参会してくださり、びっくりした。六年間、長いようで短かったが、そういう先生方と出会えてよかったと思う」と、卒業の感動を表していた。また、保護者の藤江和恵さんは「（保護者の入場で）子供達が入り口で作ってくれた花道が、とても頼もしく、格好よく見えた。」と、六年間での、我が子らの成長を喜んだ。

本会には卒業生・教職員・保護者・塾関係者を合わせて三百名以上が参会した。また、途中からは安西塾長も駆けつけ、卒業生の将来を激励した。

（六年　堀　周太郎）

池田医学部長に記念品（キャンパスマップ）の目録を贈る卒業生の勝丸雅子君、笠井弘子君

最後にエールを送る卒業生と教員

信濃町リノベーション

新連載が始まります

義塾創立150年　医学部100年

――近未来像を探る

〈序　章〉

慶應義塾は二〇〇八年に創立百五十年を迎える。また、医学部は二〇一七年に百年を迎える。長い歴史と伝統の中で、慶應義塾大学医学部が慶應義塾の中で大きな光を放ち続け、その価値を高めてきたことは明白であり、医学界の中においても同様である。ものすごいスピードで変化していく社会状況の中で今後も医学部が塾内外でトップランナーであり続けるために、ソフト、ハード面でのさらなる充実が期待される。今後の教育、臨床、研究のために必要なことを多くの方が共有できれば、方向性がより明確になると考え、この連載企画を立ち上げた。もちろん、医学部新聞としてできることは限られているが、少しでも医学部が大きく発展できるように微力ながら貢献していきたい。限られた紙面であるのですべてを網羅できないことは言うまでもなく、またこの連載に掲載される論点には賛否両論、地に付いた幅広い意見を期待している。構成は、寄稿、インタビューや対談などで行っていく予定である。今後とも、三四会の先生方からご指導いただければ幸いである。

まず、現状の認識のために、ここ数年の進歩を簡単に振り返ってみよう。研究面においては、総合医科学研究センター・リサーチパークが二〇〇一年に完成して、お互いの研究グループが協力し合いながらトップレベルの研究成果が生み出されている。教育面においては、医学教育統括センターが設置され、OSCE、PBLなどの新しい教育システムへの対応、双方向性デジタル教育教材を装備したサイバーメディカルスクールも新しいシステムとして機能を始めた。医学界において三十六年ぶりに改革された卒後研修は二年間の研修医としての前期研修、三年目以降四年間の後期研修が、有給化を含め、新しいシステムとして動き始めている。診療面においては、常に患者さんの側に立つ医療の実践に向けて、診療科の枠を超えたクラスター作りが模索されており、今後この展開が期待される。そして、現在もっとも大きな案件は、新年座談会でも議論された、今後の信濃町キャンパスに於ける医療の展開のあり方である。これを踏まえての組織改革と同時に新しい病棟と臨床研究施設の建設がある。

その最初のステップとしていわゆる高次医療センターの建設計画が新病棟へのアクセルになろうことも予測される。更に病棟再興のためのプロジェクトに関しては、その建設費用について、三百億円とも四百億円ともいわれるが、今こそ叡智を集め、その実現に向かって取り組むべきわれわれの課題である。一方、二〇〇二年から五年計画で進められた財政改善についても、苦労の末に黒字転換してきた病院収支など、多くの方の努力が実を結ぼうとしている。新しい時代の医学教育、臨床、研究の核となる新しい建築物はどのようなコンセプトのもとに建てられ、活用されることが望ましいのか、その具体的な姿を多くの意見からまとめる時期にきているように思われる。

そして、このようなことを考える時、建物というハード面はもとより、柔軟かつ横断的なものの考え方や、業績評価システムなどソフト面での再構築も激動の時代に即した方向への大転換が求められていることを忘れてはならない。新しいコンピューターにどんどんと新しいOSソフトが開発されていくように、新しいハードを使いこなせる新しいソフトが存在しなければ、新病棟の有効利用はあり得ない。新病棟の建設費用も含めて新しいプロジェクトは独立自尊の考えのもとに自分たちで築き上げていくことが慶應義塾そのものの発展につながると考える。百五十年のロゴマークにあるように義塾全体とのハーモニーをはかり共生していくことが大切であり、健全なる共生のために自分自身が経済的にも独立していけるだけの新しいシステムの構築が求められている。

現在、医学部長、病院長を中心に委員会が作られ、三四会においても広く有識者を集めて、そのコンセプト作りが始まりつつあることも合わせ、医学部新聞としては、どのようにこのプランが進んでいくのかをお伝えしていきたい。次号から、いろいろな立場の方からコメントをいただき、三四会会員の皆様にその道のりを少しでも具体的にお示しできればと考えている。

ノーベル医学・生理学賞授賞（第7回慶應医学賞授賞）

バリー・マーシャル博士が講演

バリー・マーシャル博士は、二〇〇五年十二月に、ピロリ菌の発見と胃・十二指腸潰瘍の病態解明の功績を称えられ、ノーベル医学・生理学賞を受賞されました。ノーベル賞受賞後、初めての公式訪問国として日本を選ばれ、その来日初日の三月十三日（月）に塾医学部を訪問されました。博士は、すでに過去二回、本塾を訪問されております。第一回目は、二〇〇二年五月十一日に「小林六造記念ヘリコバクター・ピロリシンポジウム（会長：石川博通教授）」が三田の北館で開催された折に訪問され、「*Kobayashi and Helicobacter pioneer*」と題する特別講演をされ、翌十二日には同じ北館で開催された市民公開講座でもご講演をされました。このシンポジウムは、大正時代に北里研究所の小林六造博士（後の塾医学部細菌学教授）と葛西勝弥博士が、犬猫の胃から分離した螺旋菌をウサギに接種することと出血性病変ができること、さらに駆虫薬にて除菌されることを報告しており、後に、これがヘリコバクター属の菌で、この属に対する世界で初めての除菌療法であったことが脚光を浴びました。つまり、このシンポジウムは、マーシャル博士らによるピロリ菌発見より六十年以上前の小林博士の業績を称えるために開催されました。その後、日本ヘリコバクター学会において、「小林六造記念ヘリコバクター賞」という学会賞が創設されております。第二回目は、二〇〇二年十一月二十八日で、第七回の慶應医学賞（Keio Medical Science Prize）の受賞のために塾医学部を訪問され、北里講堂にて記念講演「*Helicobacter pylori*: past, present and future」をされました。その三年後、博士は、二〇〇五年十二月にノーベル賞を受賞したわけで、慶應医学賞受賞者でノーベル医学生理学賞を受賞されたのはお二人目です。

臨床医としての視点貫く

ピロリ菌発見　日本の研究との関連語る

そもそもマーシャル博士は、ピロリ菌の分離培養成功から胃炎、胃・十二指腸潰瘍の病態と診療面の大幅なパラダイムシフトを成し遂げたのちも、ラボでのデータ競争のみに終始することでなく、常に、臨床医としての視点で研究を継続され、非常に日常的なものを如何に目を大きく開いて観察するかという科学の基本を貫かれたようです。この姿勢がノーベル医学・生理学賞の受賞に結実したことは、ノーベル賞の基本に戻った素晴らしい受賞であったといえます。いずれにしても、博士の業績により、消化器の教科書の、特に胃・十二指腸疾患の章は、ほとんど、書きかえられました。博士の業績は、固定観念のない純粋な発見ですが、決して単なる幸運ではなかったわけで、一九五〇年代より以前の文献の充分な検索に基いた作業仮説と信念による成果であったと思います。

今回は、三度目の訪塾でしたが、ノーベル賞受賞後、初来日の初日に塾医学部への訪問を選択されたことは非常に名誉なことであります。博士は、講演に先立ち、消化器内科研究室を訪れ、鈴木秀和講師ら教室の若手と共同研究について熱心に討論され、病棟での消化器疾患の症例呈示にも白衣姿で参加されました。慶應医学会主催の講演会は、六時三十分から北里講堂で池田康夫医学部長の開会の言葉ではじまり、私が博士をご紹介した後、博士は、塾のネクタイをされて登壇され、慶應医学賞受賞三年後、ノーベル医学生理学賞をとられて満杯の北里講堂において凱旋講演をされました。講演では、まず、ストックホルムでのノーベル賞授賞式の模様をビデオでご報告され、その後、「Benefits of Medical Research - Now and in the Future-」という演題でピロリ菌の発見と日本の研究との関連、さらには医科学研究の未来像について広く言及されました。講演後には、参加者全員が集合し博士を囲んで記念写真を撮りました。写真中でマーシャル博士の手にされているのが、ノーベル医学生理学賞の金メダルです。その後の記念夕食会では、これまで二十年間の苦労話や今後の塾医学部との共同研究計画についての話題で大変盛り上がりました。翌日、オーストラリア大使公邸においてマレー・マックリーン駐日オーストラリア大使主催の歓迎レセプションがあり、医学部からは、私を含め、池田医学部長、石川教授、鈴木講師の四名で参加しましたが、マーシャル教授は、この日も塾のネクタイをされており、駐日オーストラリア大使は挨拶で「マーシャル博士が日本との関係を重視していることは、本日彼が慶應義塾大学のネクタイをしていることでも明白である。」と述べられました。北里先生が、臨床医学と基礎医学の融合を目指した慶應医学は、国際的先見性も評価される機会も得ることができました。

バリー・マーシャル博士と本領域の全ての研究者、臨床家の益々の発展を祈念し、私の教室でお世話させていただきました一大イベントのご報告とさせていただきます。

日比紀文

（消化器内科教授　52回）

鑑往知来

ある日見た夢の中で、私は塾長になっていた。学長と理事長を兼ねているという責任感と重圧の中、創立百五十周年という節目に何をするべきかを考えていた。福澤先生ならこの激動の時代にどう考え行動されたのか、ソフトとハード両面の改善・充実を考えながら、学塾の未来を展望していた。三田、日吉、信濃町、藤沢各キャンパスからの要望は多い。予算は無尽蔵にあるわけではない。三田は正面南校舎、日吉も講義棟、日吉記念館など老朽化した建物が多く、建て替えが必要だ。一貫校としての新しいコンセプトをもつ教育も作り上げたい。そんな中で、信濃町キャンパスを思い浮かべた。病院だ！早稲田にはない大きな特徴である医学部、病院のさらなる充実をはかることは慶應義塾の未来には欠くことができない。それには老朽化した病棟や臨床研究棟の建て替えが必要だ。これからの医学部を背負う若者に未来のある施設を提供したい。最高レベルの医療を患者の視点で提供することが義塾の大きな使命だ。駅の横断歩道に建ち、創立百二十五年記念事業で建てられた新棟の後ろにそびえる別名慶應タワーを眺めるイメージができたところで我に返った。建て替えには数百億円の資金が必要だ。募金規模は二百五十億、すべてを病院につぎ込むわけにはいかない。全体の記念事業として九百億、他学部、一貫校とのバランスをどうとろうか。教育、研修型の病院とはいえ、収支のバランスを無視しては今後の展望が開けない。膨大な費用をかけるのであれば、未来型の医学教育、医療の展望を具体的に示すこと無しに、塾内外の理解と支援を仰ぐことは難しいだろうし、全く新しい経営的な発想を組み込んだ新病院ができるとすれば、それだけでわが国の医学界を先導することになろう。これは夢もあるし必要だが、大変な知恵と汗と決断を要する。財源は、銀行から借りようか、大企業とタイアップをしてPFI（Private Finance Initiative）を組もうか、ハード面のみでなく、ビジョンといったソフト面をどう充実させようか…と頭を悩ましているところで目が覚めた。

その朝、いつものように信濃町駅の横断歩道に立ち、新棟に輝くペンマークに誇りを感じながら、さきほど夢で見た慶應タワーを待ちこがれる、そんな自分がいた。